文化の陥穽・文化の反省

高　田　里恵子

1　「文化」という導き手

『文学と文化』という題名を自分の著書につけてしまうことは，現在の日本ではかなり勇気を必要とする行為だろう。もっとも，凝った洒落た題名を持つ学術書に飽きあきしている人が何らかの戦略を込めて，わざとこういうタイトルを選ぶということは，今ならもちろんありうることだ。一切の戦略とは無縁な高橋健二が1942年に岸田国士の後をついで大政翼賛会文化部長に就任した直後にこの題名を選んだときには，つまり，今まで「ドイツ」とどこかにしるされていた題名から卒業したときには，ドイツ文学プロパーから正真正銘の「文化人」へと転身する決意が込められていた。もちろん，すでに「文化人」という呼名は，現在のような，やや軽蔑的なニュアンスももっていたが，高橋健二の場合はこのような「文学と文化」の無力を何としてでも克服することが問題となっていた。「文学，広くは文化一般が国家の大いなる力にならねばならない。文学も文化も国家と興亡を共にするものである以上，そうあってこそ初めて真の文化，真の文学であり得るのである」[1] とこの本の序文で述べ，「知識人を文化戦へ」と題された新聞論説の中で，「知識人はとかく静観的批評的で腰が重い。動くことを億劫がる知識階級が動きだすような雰囲気と組織とを作って行くことも翼賛会文化部の課題の一つであろうと思う」[2] と就任の抱負を語る彼は，これ以後も「文化人」の戦争動員のために力の限りを尽くす。もちろん，高橋健二のような何の精神的ねじれも持たない「常識人」の場合，戦時中に発表された「非常時」の言葉を本気に取ってしまうのは，本人にとって酷なことであるし，当時の眼から見ればけっして異様ではない彼の発言を批判することは時間の無駄にすぎない。

いや，むしろ高橋健二の発言がまったく奇矯さを欠き，陳腐で迫力がないことがわれわれを憂欝にさせるくらいだ。もっとも，文化部長が戦後あまりにも屈折なく，あまりにも陽気に変身してしまったことはやはり異様に映るかもしれない。そして興味をひくのは，戦中と戦後の高橋健二のこのような豹変ぶりではなく，その変化の下に在る首尾一貫性のほうなのである。敗戦からわずか11日目の新聞に「文化の反省」と題する論説を載せ，「美しい日本，文化日本に我々の生きる道が極めて手近に極めて有力に残されているのである。今日はじめてほんとにそれを自覚するのは寧ろ遅すぎたとも言える。国力の総体を深く考えず，無理に強い日本への道をひたぶるに歩んだところに，誤りがあった。美しい日本への道を選ぶ聡明さが足りなかったことは，痛烈な文化的反省が加えられなければならない」[3] と言う高橋健二は，常に変わらず無邪気な「文化」の信奉者だった。1986年，高橋健二はついに文化功労者となる。彼以上にこの称号にふさわしい人間がいるだろうか。

そもそも「文学と文化」こそが，旧制第一高等学校入学以来，高橋健二をとらえ，そして文化部長を引き受けるというところにまで彼を導いてしまったものだった。この役職のために戦後しばらく公職追放となる高橋は，だから，その心根としては高橋と同じ場所にいながら，いや彼ほどの真摯さもなくナチスの旗振り役をつとめながら，彼ほど無警戒にお人好しではなかったために何のお小言も食らわなかったドイツ文学者たちとは違って，まさしく「文学と文化」の犠牲となったのであるし，追放中ヘッセ研究に没頭したという彼を支え慰めたのも「文学と文化」であったはずだ。「政治が運命になった」とは，高橋健二が，心では激しい抵抗を試みつつナチスの言いなりにならざるを得なかった（？）ハンス・カロッサを弁護し，その「不運」に同情を寄せるときにたびたび使う表現であるが，高橋の場合は「文化」が運命となってしまった。彼は公職追放という体験にもかかわらず，「政治が運命になる」二十世紀からとり残されたのである。

とまれ，ナチス文学やヒトラーを絶賛することも，反戦主義者ヘッセを尊敬することも，ドイツ版「わだつみのこえ」であるドイツ戦没学生の手紙を

翻訳することも，ナチス抵抗者としてのケストナーの伝記をものすことも，もちろん大政翼賛会文化部長として聖戦遂行を文化面において援助することも，すべて等しく，高橋の「文学と文化」に対する情熱から生まれてきた。たいていの「文化人」ならば，自分のそうした情熱を無防備には表わさないものだから，もし高橋健二に責められるべきところがあるとしたら，その能天気すぎる感激屋ぶりだけかもしれない。弱冠二十四才の彼は，貧困と病気に苦しみながらも「文学」に献身する「シラーの悲壮な生涯をしのんで涙をぼろぼろ流しながら」[4] 754ページもの処女作『シルレル』を書き上げたという。大正の最後の年のことであった。その前年，東京帝国大学を卒業した高橋健二は（旧制）成蹊高校の教師兼東大の副手となり，研究者として恵まれたスタートを切っている。

2 「教養」の誕生

それにしても，これほどまでにひとりの「人間の生き方」（これも高橋健二の最新の著書の題名だが）を決定してしまう「文学と文化」とはいかなるものだったのか。

高橋健二のいう「文学と文化」は，旧制高校的と形容される教養主義，当時の流行語を使えば文化主義に貫かれていた。1919年（大正８年）に第一高等学校文科乙（ドイツ語専修）に入学した高橋は，大正中期にブームとなる文化主義，そもそも「文化」という言葉が現在の意味として定着するきっかけをつくったこの運動に，場所（旧制高等学校あるいは旧制高等学校的経歴）と時期（第一次大戦前後）と起源（ドイツ理想主義）において，遭遇することになった。

たとえば，高橋より五つ年長の三木清は一高時代を次のように振り返っている。

> あの第一次世界戦争という大事件に合いながら，私たちは政治に対しても全く無関心であった。或いは無関心であることができた。やがて私ども

を支配したのは却ってあの「教養」という思想である。そしてそれは政治というものを軽蔑して文化を重んじるという，反政治的乃至非政治的傾向をもっていた，それは文化主義的考え方のものであった。あの「教養」という思想は文学的・哲学的であった。それは文学や哲学を特別に重んじ，科学とか技術とかいうものは「文化」には属しないで「文明」に属するものと見られて軽んじられた。云い換えると，大正時代における教養思想は明治時代における啓蒙思想　―福沢諭吉などによって代表されている―に対する反動として起こったものである[5)]。

このような「文化」と「文明」の対立図式，つまり英仏の功利主義的「文明」に対するドイツの「文化」と「教養」（こうした場合，「文化」と「教養」はほとんど同じ意味をもっているとさえ言えよう）という自負がドイツ近代の精神史の最も大きな特徴であることはすでによく知られている。さらに，こうした劣等感ゆえの優越意識が，やはり「遅れてきた国」である日本において奇妙なかたちで再生産されたことも，第二次大戦後はしばしば苦々しい面持ちで指摘されてきた。そして，われらが高橋健二の首尾一貫性を支える第一のものも，ドイツ的「教養」の礼賛と，その敵と見なされる近代文明への批判的眼差しという立場である。高橋健二の称賛の的となったヘッセもナチスの文化政策もそしてドイツ的教養人も，この文明批判という態度においては確かに一致している。もっとも，ヘッセもヒトラーも18世紀後半このかたドイツの「文化」と「教養」を独占しようとしてきた教養市民層ではなく，彼らはともに違った方向から，没落しつつある教養市民層を批判したと言える。しかしまた，ナチスも教養市民層も同じように，軽薄な文明の国に過ぎないワイマル共和国を憎悪していたのである。第一次大戦後の文化，現在ワイマル文化と呼ばれて多くのドイツ研究者を引きつけているものは，ドイツ的伝統から言えば，「文化」の名に値しないものであったし，ワイマル共和国が基づく「民主主義」は「教養」の理念に大きく反するものであった。ナチスの台頭は一方でドイツ的伝統の復活であり，他方では「教養」と教養エ

リートに対する最後の一撃を意味している。

この混乱のさなかに，と言うより，ナチス政権の安定によってあたかも混乱が収拾されたかのように見える新たな混乱のさなかに，高橋健二はドイツ担当の「文化人」として出現したわけで，これはやはり彼にとっては不幸なことであったにちがいない。当時の彼のドイツ文学者としての仕事でいちばんの比重を占めたものは，第一次大戦以後の現代文学・現代作家を紹介するというものであったが，彼の記述は，一見混乱が支配しているワイマル時代の文学の中に，如何に脈々と機械文明批判・文化と教養の擁護という正統派が生きつづけてきたか，そして如何にナチスの文化政策によって混乱が収拾され，ドイツ的な文化の伝統が復活したか，という方向で書きすすめられることになる。日本のドイツ文学者たちのあいだでは，何が正統な「ドイツ文化」なのかをめぐって，頼まれもしない代理戦争が勃発したかのような観を呈していた。1933年5月の時点ではナチスを「文化を壊つもの」と呼んだ高橋健二も，やがてナチス文化の正統性を主張するグループに配属される。

それでもなお，ナチス文化は必ずしもドイツ文化ではないと言い得るだろうか。第一次大戦後，民主主義体制が謳歌された頃はドイツに於いても，帝政時代のドイツ文化は歪んだものであったことが度々 — 特にハインリヒ・マンたちによって — 指摘された。それは一面の真相を指摘しているが，同じ論法を用いれば，社会民主主義時代のドイツは本来のドイツではなかった，と言い得るのである。ナチスはそれを強調し，別なドイツに，即ち本来のドイツに帰らなければならない，と主張した。こう考えて見れば，〈時は変わり，我らもその中にあって変わる〉という言葉の深い意味を考えずにはいられない。時と共に万物が変わるように，ドイツとその文化も変わったのである。その変化を否定して，ナチスはドイツにあらずというのは，歴史の流れを無視した見方である[6]。（強調原文）（1940年6月）

もちろん〈時は変わり，我らもその中にあって変わる〉という言葉を実践するかのように，戦後になれば「ナチスの暴虐の荒れ狂うドイツの中のそうでないドイツ」[7]が高橋健二にとっての「本来のドイツ」になるのだが。

さて，話をもう一度「教養の黄昏」に戻すと，そもそもドイツ帝国の成立ごろから，「文化」と「教養」は決定的な危機にさらされていたのである。帝国（主義）を支えるための産業社会の発展と自然科学の優位が，「文学」や「学問」（人文科学）を圧迫することについては，説明を要さない。もちろん逆説的に言えば，こうした圧迫があったからこそ，この時期のドイツ文学は，資本主義化・帝国主義化・合理化される体制に対するプロテストとして花開き，「学問」もまた同じような道を進むか，あるいは反対に体制側の御用学問になることによって栄えたのである。「教養」や「文化」は，はじめから「反政治的乃至非政治的傾向」をもっていたのではない。その概念の始まりにおいては，ドイツ的「文化」や「教養」は封建勢力に対する市民の自己主張として，また国民国家を欠く「ドイツ民族」を精神的に統一する武器として，きわめて政治的かつ反体制的なものであった（言うまでもなく，反体制的イコール正義というわけではない）。19世紀は，この「教養」が政治的性格を失い，体制と妥協し協力しあい，あるいは政治には関わらないという政治的態度を身につけていく過程であった[8]。

いずれにしろ，日本で「文化」および「教養」が，三木清が述べているような地位をしめたとき，本家のドイツではその没落，あるいはその担い手たちの没落意識こそが問題になっていたのである。このズレはいったいどこから生じたのだろうか。

近代日本では，明治維新とともに，「文化」（もちろん，西洋的文化という意味だが）の輸入と「文化」の没落体験が同時に，近代化とそれに対する批判が同時にやってきた。それは近代日本の知識人の在り様に大きな影響を与えており，たとえば鷗外と漱石はこの点においても，すぐれて近代日本的な知識人なのである。よく指摘されることだが，彼らは日本の近代化に最も貢献した者でありながら，また同時に最も鋭い近代の批判者でもあった。近代

小説をとってみても，近代的知性をもちしかし同時に「文学的」である主人公が，産業社会を代表しているような人間に敗れさるという構図は，『浮雲』や『金色夜叉』以来ひとつの伝統になっているだろう。

三木清の言う福沢諭吉的啓蒙思想あるいは「文明」とは，技術・産業優先と実学志向のことを指しているのだろうが，これは，欧米による植民地化の危機にさらされていた明治日本にとっては死活問題であった。狭いヨーロッパ内での劣等感を云々するドイツ的煩悶なぞ本来，甘っちょろいの一言で済まされるものであったはずだ。日本がひとまず安心して「文化」や「教養」を言いつのることができるようになるには，まず技術や産業の面で欧米と肩を並べる必要があったわけで，とりわけ第一次大戦は，よく言われるように，戦争に巻き込まれることなく日本に好況と植民地をもたらした。西洋は，まさに日本にとって，没落してくれたのである。ドイツの教養主義が，19世紀末の産業社会の成立によって，さらに第一次大戦の敗戦とインフレによって崩壊の危機にさらされたのに対し，日本の教養主義は，明治維新後の産業化とその順調な発展と，そして本家のドイツの敗戦があってはじめて，成立しえたと言える。それが，大正期であった。

さらにもうひとつの日本的特徴を述べておこう。ドイツの教養主義の牙城はギムナジウムと大学であった。やはり少数エリート教育を主眼とする旧制高等学校と帝国大学という制度は，このドイツの教育の在り様によく似ているようでいて，しかし決定的に異なっている。1886年（明治19年）に設立された帝国大学の理念は実学志向であり，その目的は「国家ノ須要ニ応スル学術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スル」ことであったために，設立当初から理系・技術系，わけても医学部の突出と，高級官僚養成機関としての法学部（東京帝国大学法学部）の特権化が前提されていた[9]。帝国大学が設立されたころドイツではまさに「実学」と「教養」との争いが激しさを増していたのだが，近代日本は当時のドイツから，まずは医学と憲法という実学をとりよせたというわけなのだ。

しかしその一方で，帝国大学の前段階である旧制高校では，いわゆる人文

的知性,「教養」というものが重要視されていたのである。それはカリキュラム上というより，たいていは学校の寮で集団生活をしていた生徒たちのあいだの「雰囲気」に基づくものであり，われわれが現在，旧制高校に対して抱いているイメージは，大正時代初期にできあがったこの教養主義的雰囲気から発している。旧制高校から帝国大学への進学はそれほど難しくなかったので，明治30年代後半からすでに始まっていた日本的受験戦争は高校入学時に終了し，少数のエリートたちが実学期間をむかえる前に，人文的知性を磨き人間的関係を育むというのが旧制高校の目的，と言うよりエリートたち本人の自己理解であった。旧制高校と帝国大学というこの体制に支えられて，近代日本の発展の上で「実学」と「教養」が奇妙な共犯関係をはじめから結んでいたと言えるかもしれない。これは，高橋健二が主導的な役割を果たしたようなかたちでの，日本のドイツ文学受容にとって，大きな意味をもっている。この「教養」ははじめから没落していた。つまり葛藤の歴史を背後にもたないまま，現在われわれが使う意味での「教養」になっていたのである。大正教養主義は軍国主義や植民地主義とけっして矛盾しなかった。しかし，そのことが明らかになってゆくのは大正期ではなく，あの昭和の暗い時代，高橋健二が「文化人」として活躍をはじめた頃であった。

3 「教養」の末路

日中戦争の始まった1937年（昭和12年）に高等学校に入学した山下肇（ドイツ文学者）は，高橋健二・芳賀檀・高橋義孝・石中象治などのナチス文学紹介者主導で進められた当時のハンス・カロッサ受容を苦々しく思い出しながら，こんなふうに述べている。

一時「ほのぼのヒューマニスト」という学生用語がはやったことがあるが，カロッサの愛読者にはそうした人々が多い。いわゆる文学青年はあまり読まない。文学青年はもっと人間くさい苛烈な翻弄関係の中にはいっていって，むしろ真実の否定から文学的出発を試み，技術的な実験室に出入

りすることが多い。フランスやロシア文学の影響が創造の風土となる。カロッサを読む人は，かえって理科生に多く，とりわけ医学生に多いことは当然であろう。しかも，その状態は老年にいたるまで続く。地方の田舎町の老医師などに，案外カロッサの愛好家がいる。多少ドイツ語を知っていて，特に文学的素養のあるわけでない読者には，カロッサは気やすく親しみやすくはいっていかれるのである。しかも，読後には，あの充実感と治癒力がはたらき，一般の人の味わえない教養的満足感がその人をほのぼのとみたす[10]。

また，他のエッセイの中でまったく違う連関ながら，しかし同じことを言っている。

たとえばフランス文学，ロシア文学などの畑の人々は，つい最近まで，それを専攻しただけでは飯が食えなかった。アカデミズムの中にも入れなかった。日本のこういう条件下で，彼らはいやおうなしに筆一本で食っていかなければならず，職業として文学創造を選び，作家（職人，三文文士）になっていく。そこでいわば，プロの意識，文士気質のようなものがこびりついた形で，昭和になるとずっと一貫して，彼らはくつわを並べて日本の文壇にのし上がっていくのである。それに比べると，ドイツ文学，英文学の人々は，教職というものが一方にあり，特にドイツ文学の場合，たいていは旧制高校の教授になって各地方に散らばる。そして中心から遠のいたところで悠々自適，自分の好きなペースで学問を続ける。そこではプロ的な文学者の扱われ方ではなく，学者，教授として待遇される。（中略）職業的文士としての，特殊な文壇社会のプロとして生きないで，いつもその外にいて傍系として生き続けていく領域，ここに近代日本のドイツ文学を受け入れる素地が根強く，一つの伝統としてつながっていき，その周辺にドイツ文学の読者層が形成されていったということがあると思う[11]。

二つの発言とも日本的教養とドイツ文学受容との関連を指摘しているわけだが，一方にプロ的作家とか「文学」とかフランス及びロシア文学が配置され，それに対してディレッタント，ほのぼの，悠々自適，旧制高校教師，そして「教養」とドイツ文学がおずおずと差し出されるという構図になっている。たしかに，創作としての日本近代文学には，フランスとロシアが圧倒的な影響力を行使したのに対して，「教養」としての音楽・哲学・文学はドイツの専売特許だった。事実としてそうであったというより，そのように理解されることによって，ますますそうなっていった，というほうが当たっているかもしれない。つまり，本来はドイツ文学者とその予備軍の自己理解の問題なのである。その時見落としてならないのは，山下肇の発言じたいににじみでている「内心忸怩たるものがある」といった様子である。「人間くさい苛烈な翻弄関係」やら「プロの意識，文士気質」やらが無条件に本来の「文学」にあるべきものとされているのを見るとき，「文学」の異常なまでの特権化を感じざるをえない。これはこれで，日本の近代文学とその受容を考えるときに，一つの大きな問題となるのだが，今は触れずにおこう。

とまれ，高橋健二があれほど翻訳をし本を書きして「プロ的な」活躍をしているように見えても，ついに山下肇の言うような「教養」の領域から出なかったことは事実である。いやむしろ，彼の才能はカロッサにしろヘッセにしろケストナーにしろグリムにしろ，そしてナチス文学にしろ見事に「ほのぼの」とした「教養」の糧に変身させてしまうところに在ると言えるかもしれない。そして何より，高橋健二にとって「教養」への信頼は，「（ほのぼの？）ヒューマニズム」の証，つまり自分が心のなかでは戦争に反対であったことの証となるのである。高橋健二が戦後に行なう回顧譚に独特な口調とレトリックがよく出ている次の文章を引用してみよう。

さかのぼるが，河合先生の古典研究会で私も東大の学生にシラーの美学論文の話をした。経済学とは関係ないが，古典的教養がヒューマニズムの基礎だという先生の考えにもとづいていた。それから河合栄治郎編の学生

叢書の中の「学生と先哲」(昭和十二年十二月)と「学生と読書」(昭和十三年十二月)に，私も「ゲーテとシラー」，「読書の回顧」をそれぞれの巻に寄稿した。この叢書には，河合先生の他，武者小路実篤，倉田百三，阿部次郎，三木清などが寄稿していて，学生の間に人気があった。「学生と教養」，「学生と生活」などの巻で始まったのを見てもわかるように，自由主義的な教養主義に貫かれていたのであるが，この叢書さえ昭和十七年早々，絶版を余儀なくされた。そして私も勤め先の校長から，河合栄治郎と親しくしていることについて警告をうけた[12]。

すでにナチス文学の紹介者として雑誌などで活躍していた高橋健二は，「読書の回顧」では，ナチス・ドイツのことには一切触れず，ドイツの教養小説の伝統，ゲーテ等の偉大な作家たちの伝記，そしてシラーの美学論文を学生たちに薦め，いつもながら編集者の意図に見事に添うように，絵に描いたような大正教養主義的読書を体現してみせる。

一方で，この頃から高橋健二が取り組んだのは，新たな事態として直面している戦争やらナチス・ドイツやらを「教養」や「文化」とどのように調和させるかという問題であった。たとえば，「読書の回顧」とほぼ同じ時期に研究誌に発表された「シラーと第三国家の理念について」(1938年10月)の場合などは題名だけ眺めると，見事に高橋健二的調和が達成されたかのようにも見える。しばしば指摘されているように，ナチズムという思想は，けっしてドイツ文化の中の突然変異ではない。とりわけ広い意味でのドイツロマン主義の作品から，所謂ナチ的・全体主義的な思想を引き出すのは容易いことであるし，当時のドイツの御用学者たちがこぞって行なったことでもある。

従って，シラーの理想国家論とナチズムの思想を結びつけるのは残念ながら高橋健二の独創ではなく，またこうした形で結びつけることも一概には退けられない。しかしここでまず注目しておきたいのは，この論文が学術同人誌に発表されたもので，けっして編集者側の押しつけのテーマで無理遣り書かれたものではなかったということである。雑誌や新聞で活躍した高橋健二

は，ナチス文学やナチス政権の肯定的な紹介者という役回りをけっして逸脱しない善良な書き手だった。「シラーと第三国家の理念について」という題名は，高橋健二の当時の論文の中でも最も時流に媚びているかのように聞こえるが，実はここでは必ずしもその必要はなかったのである。この論文で扱われているシラーの「人類の美的教育について」の翻訳を，高橋健二は安部能成との共訳でやはり1938年（昭和13年）に出版しており，このシラーの作品は，シラーの演劇よりも美学論文を好むとしばしば発言している高橋健二にとって，ナチスによってシラーが持ち上げられたことなどとは関係なく前々から，特に重要な意味を持っていた。おそらく，河合栄治郎の研究会での講演においても，中心になったのはこの美学論文にちがいない。彼を魅きつけるものはいったい何だったのだろうか。

高橋の論文はまずナチス・ドイツ＝第三国家の話から始め，シラーが「人類の美的教育について」ではっきりと第三国家という言葉を使っていることに驚いてみせながら，ローゼンベルクの『二十世紀の神話』なども援用しつつ，「従って，ナチスによって高く評価されるシラーは第三国家の預言者であったと言われてもよいわけである」[13] と結び，当時の高橋健二がジャーナリズムに寄せた文章の特徴がここにもよく表れているのだが，しかし，後半部で具体的にシラーの国家構想に触れるとき，ナチスはどこかに完全に消えてしまい，むしろシラーとナチスの一致が単なる言葉の使い方の上での偶然の一致であるかのような印象すら与えてしまう。つまり，シラーの理想国家論とナチズムの国家論はいささかも結びつけられてはおらず，芸術・文化・教養が中心に据えられ，芸術による十全な人間性の開花がめざされるというシラーの第三国家すなわち「美的国家」に対して，これもまたいかにも高橋健二らしく，ひたすら「共鳴」と「感嘆」の声が贈られるというわけなのだ。「理想の国から詩人を駆逐したプラトンよりも，シラーに対し我々はより多く共鳴を禁じ得ないのである。」[14]

シラーの「美的国家」を理想とする高橋健二にとって我慢ならなかったのは，文学や教養が役立たずのものと見做されること，教養と文化に対する尊

敬の念の欠如であった。従って，高橋健二は敗戦前も敗戦後も変わらず，日本の文化政策の貧しさを嘆きつづけなければならない。ここに典型的な日本的「文化人」が現われるのである。

国民全体の教養が一切の基礎であり，そこから政治力も生産力も科学力も技術力も生まれてくることを忘れていた。即ち国民教養の，文化の敗北であったという外はない[15]。

これは，1945年の11月に出版された『美しい日本への道』という，高橋健二の戦後の最初の著書の中に見られる言葉である。「反省叢書」（！）と銘打たれたシリーズの一冊なのだが，元大政翼賛会文化部長高橋健二の反省が綴られているわけではなく，敗戦国民に反省を促す文章となっている。そして勝者たるアメリカの国民教養の高さ，特にその科学的合理主義は手放しで称賛されるというわけだ。すでに述べたように，高橋健二は敗戦後になって突然，国民教養の向上を訴えだしたのではなく，この点で首尾一貫した行動をとっている。ただし，ヘッセを引き合いに出しながらアメリカの「物質文明」を批判したり[16]，またユダヤ的功利主義の文化の代表格としてアメリカ文化を挙げていた[17] 当時の高橋健二にとっては，称賛と模範の対象は当然ナチス・ドイツの文化水準の高さであった。

戦争完遂が主要目的である時，人生論をむし返すのなんか，無用の沙汰だと言われるかもしれないが，それは無用の用の優なるものである。天野（貞祐）氏は，ドイツの強さには，一般的な文化水準の高さはもとより，ドイツ人の音楽好き，ヒトラー総統の芸術家的素質までも，見えざる働きをしている，と述べていられる。精神の高さ，叡知の豊かさ，知性の鋭さというようなものは国家総力の見えない力になっているのである。そういうものの低い国民には，すぐれた兵器の製造や駆使や，雄大で周密な作戦や，占領地の人心の収攬というようなことは不可能にちがいないからであ

る[18]。(1942年4月)

そして比較のために，再び『美しい日本への道』から引用してみよう。

前大戦の時，ヘルマン・ヘッセは，交戦国の政治家に向って彼らがもっとベートーベンを聴いたならば，人間らしい素直さに立ちかえって，戦争継続の愚かさを悟るだろうと言ったことがある。実際，政治家が政治にのみ没頭せず，人間らしい心境を培うゆとりをもっていたならば，もっと異なった政治が行なわれえたに違いない。小説は無用なもの，或は時として有害でさえあるかも知れない。しかしそれが人生の機微を教え，常識を養い，人間らしさをゆたかにし，分別を具えさせる点で大きな働きをすることは否めない。士官学校や商科大学の著名な先輩が母校にそれぞれ文学書を寄贈し，その閲読を奨励したという例もある。有用の用の外に無用の用もあることを，そしてそれが一般的な人間教養にとって重要な意義を持つことを無視してはならない[19]。(1945年11月)

「教養」が戦争遂行のために「無用の用」を発揮するのか，それとも戦争回避のためなのか，という小さな違い（ただし，断じて矛盾ではない）を抜かせば，それぞれ太平洋戦争勃発と敗戦の直後に書かれているこれらの文章はまったく同じ内容をもっている。彼はことあるごとに，「無用」と見なされがちな「教養」と「文化」をより豊かにしてゆくべきことを訴えつづけたのである。しかも，教養向上の対象は「大衆」であり，たとえば高橋が特にナチスの文化政策を高く評価したのは，「彼等が文化を国民に享受させ浸潤させるために活発な努力を行なっていること，特に〈喜びによる力〉と称する公共団体が人生と自然と芸術との美に触れる喜びによって大衆に精神の力を養わしめようとして潑剌たる活動を行なっていること」[20]からであった。このナチス評価は1937年4月のものであるが，「大衆」と「教養」とを結びつけようとする身振りは大政翼賛会文化部長に就任する（1942年7月）以前

から始まっており，必ずしも職務上の義務感から出てきていたわけではない。また，ドイツ文学研究界の内部の人間しか読まないであろう学術論文では高橋もこうした言説を口にしていなかった。「大衆」を相手にしたとき，「文化人」たる高橋健二はある種の決まり文句を口にするようになったのである。彼が本来はナチス的思想の持ち主ではないことは明らかであるが，ある種の決まり文句の中で親ナチス的な，しかも陳腐な発言が飛び出してきたと言える。

ここではその過程については詳しく触れないが，大正から昭和にかけてドイツ文学研究が日本において制度化され，それだけ「研究」がアカデミズムの世界の中に閉鎖されていったとき，高橋健二はその世界に閉じこめられることを嫌い（彼自身の後の告白によれば，アカデミックな東大の教師たちには何故かなじめなかったそうだが[21]），一般読者を目指して活躍しようとしたわけで，その時の材料がヘッセでありカロッサでありナチスであり，そして戦後は反ナチスであった。だから，ヘッセ紹介とナチス文学紹介はこの点ではいささかも矛盾しないし，高橋健二が戦後になって反ナチスの作家を精力的に取り上げたのも，むしろ彼の首尾一貫した態度のあらわれである。高橋健二にかぎらずに昭和期のドイツ文学者のナチス加担について考えるとき，問題は，彼らがナチスの思想にコミットしたとかしないとか，倫理的にどうか，などというものでは（残念ながら）なく，彼らが，制度として確立してしまったドイツ文学「研究」の社会的意義やレゾンデートルをどのように真剣に模索したかということなのである。高橋健二もまた闘う人，しかも最も果敢に闘う人であり，それゆえに東京帝国大学を中心とするアカデミズムの世界では（不当にも）評価されることがなかった。

高橋健二の活動の開始の時期は，円本時代・文庫本時代・雑誌隆盛時代にあたっている。企画叢書の一冊として著書を出したり，文学全集や文庫で翻訳を出版したり，雑誌でドイツ紹介の記事を書くという彼の仕事のパターンは，まさに「大衆」にまで「教養」が広がった時代の到来をまってはじめて可能であり，何より彼のような居ても居なくてもよいような「文化人」はこ

うした時代にのみ存在できる。日本ではドイツとは違って，「大衆」の進出は「教養」の没落とは結びつかなかった。ここに，日本的な意味での「教養」，つまり高橋健二が「女性の教養と自覚」(1942年6月）と言ったときのような意味での「教養」が生まれてくるとともに，「大衆」と「教養」を媒介しようとする，これもまた極めて日本的な「文化人」が誕生するのである。「文化人」高橋健二の存在なくしては日本におけるヘッセ受容の特殊性はありえなかった。

もっとも，本来は彼が頑張る必要もなかったのかもしれない。というのは，高橋健二によれば，「大衆」といえども危機の場面に直面したときには，おのずと「きわめて高級」な文学，「本物の芸術作品や書物」を求めるものだからである。問題は「大衆」にとって何が危機となるかということだ。やはり，戦中と戦後の文章をそれぞれ引用してみよう。

> ドイツ文学は塹壕の中で最も読まれた，と言った文学史家もある。日本でも支那事変以来，娯楽的な大衆文学が却って下火になったというような事実は何を語っているであろうか。こうした国民の真剣な欲求に対しては国家的にこたえるところがなければならない。更に，強い日本の兵士が同時にやさしい心の持主であることが，占領地の民衆を心服させ，建設の有力な要素になっているように，国家的にも武力で獲得したものをすぐれた文化によって裏づけて行くのでなければ，真の建設は不可能である。武力で服従させたものを，文化で納得させて行かなければならない。そこに大きな文化の使命がある[22]。(1942年7月）

> このきわめて高級な作品（カロッサの『美しい惑いの年』・・・引用者）が，独ソ開戦の年，精神的に荒廃し，極度に物資の不足した時にかかわらず，初版五万部印刷されたのは，驚くべきことである。平和な時に，『ルーマニア日記』（一九二四）の初版がわずか三千部，『少年の変化』（二八年）のそれが五千部だったことを考えると，出版者キッペンベルクは『美しい

惑いの年』の価値と魅力を確信していたにちがいない。その見通しに狂いなく，戦争中から売れ続け，一九六二年までに十五万六千部に達した。尊敬し合っていたヘッセのきわめて高級なユートピア小説『ガラス玉演戯』が，少し遅れて一九四三年，スイスで二冊本として出版されるという不利な条件にもかかわらず，『美しい惑いの年』と同じように，版を重ねた。ヘッセのこの本は戦争末期カロッサの慰めとなった。さかのぼれば，ゲーテのファウスト第一部も，グリムの童話も，ナポレオン戦争でドイツが滅びようとした時に出た。それらといい，ヘッセやカロッサの作品といい，真にすぐれた芸術は，最悪の時をもしのいで，人の心を高め，生き続けることを実証している。そういう作品を書いたことこそ，最高のレジスタンスだったのである[23]。(1972年)

暴力国家の秘密警察の監視の下で人々の気持ちは暗くおびえていた。それだけ，本物の芸術作品や書物が，純粋な傾倒をもって受けとめられた。ナチス党に属さない詩人の朗読会がそのころほど多くの聴衆に喜ばれたことはなかったという。そういうわけで，カロッサはしばしば朗読会に呼ばれ，方々に旅行をした[24]。(1972年)

教養主義的読書が植民地主義や軍国主義を精神的かつ文化的に支えるものから，心の中（だけ）のレジスタンスを証明するものへと変身したのは，「大衆」においてだけではなく，本来の「教養」の担い手たる学生にあっても同じだった。高橋健二は第一次大戦と第二次大戦の両方の『ドイツ戦没学生の手紙』を訳しているが，それぞれの「訳者後書き」を読み比べてみると，その一致と相違がおのずと明らかになってくるだろう。

しかし，彼らが勇ましく戦ったのは決して外的にだけではない。開戦当時，ドイツの本屋では，ゲーテのファウストや，ニーチェのツァラツストラや，ヘルダーリーンの詩など，第一義的な文学書が盛んに売れたという

事実は，「戦争中ドイツ文学は塹壕の中で最も真剣に読まれた」という文学史家の言葉を裏書きするものであるが，その具体的な例証を本書中，ヴィリ・ナウマンその他の手紙に見出だすことが出来る。総じて，明日しれぬ戦場にあって，彼ら学生が精神に関することに如何に深く思いをひそめているかは，悲壮な戦闘の記述に劣らず，感動的である[25]。(1938年)

第三国家はドイツの青年の心を毒してしまったように言われるけれど，少なくともここに選ばれている青年は，むしろ謙虚な心の持ち主である。そしてゲーテ，シラー，ヘルダーリーン，リルケを，バッハ，ベートーヴェンを深く心のかてとし，光と愛と命とに生きている。むしろ，ドイツのあり方に対して強い批判を抱き，心から祖国に殉じる気持ちになれないのに，若い身心を砲火にさらさなければならなかった彼らこそ，真に受難者である。

同じ訳者が，フライブルク大学のヴィットコプ教授編の「ドイツ戦没学生の手紙」を訳出したのは，丁度十五年まえであった。当時は日華事変のたけなわで軍国精神のいやが上にもあおられていたころであったので，第一次大戦の際ドイツ帝国に殉じた学生の表白は異常な感激をもって日本の青年に迎えられた。国内はもとより，外地の戦場からも，訳者に感想を寄せられた青年の数は少なからず，個人的なつながりをもつようになった人々さえあった。しかし，ドイツの学生の愛国的な精神だけが日本の青年を感動させたのではなかった。一応はそうであったけれど，次第に，塹壕のなかでファウストを読むドイツ学生の姿，カロッサの「ルーマニア日記」に見るように，砲煙のなかにあっても，絶えず自然に目を開き，自分の魂を凝視する瞑想者の精神が，日本の青年をひきつけるようになったのであった。民族の誇りと愛国の熱情にもかかわらず，祖国のあり方に対し，反省的にならずにはいられなかった点で日独の学生は共通の悲惨な運命を体験したのである。それが両者を深い沈静に誘った。あまりにも大きな犠牲ではあったけれど，その犠牲は無意義ではなかった[26]。(1953年)

こうしていささか長すぎる引用を並べてみると，戦後の「平和主義者」たる高橋健二のほうがより一層グロテスクになり，あるいは通俗的物語により深く毒されているのがわかる。彼の「きわめて高級な」芸術への信頼にはすでに強迫症的なものすら感じられるではないか。たしかに，娯楽文化やサブカルチャーを視野に入れようとせず，しかも西洋一点ばりの高橋健二は今ではすっかり時代遅れの「文化人」になってしまった。しかし高橋健二は，「きわめて高級」ではないが故に初めて文化の発信地となりえた二十年代のベルリンの猥雑な文化に同時代人として接していながらこれについてはほとんど言及したことがないわけで，当時からすでに時代遅れと言えば時代遅れだったのだ。それに，こちらのほうが重要なのだが，彼の強迫症じたいは，B級文化や少数民族文化やエスニックな文化を称賛しつつ現代社会を批判する今様「文化人」にも受け継がれているのである。高橋健二もまた幸福にも，「文化」の擁護を批判的知性の仕事と堅く信じることができた。そうした仕事は社会的な地位も財産ももたらさないだろうが，体制には組しないで生きてゆこう。中学4年から第一高等学校に合格できるほどの優秀な成績でありながら東京帝国大学法学部へは進学せず，「文学と文化」のための仕事につくことを自ら選択した若き日の高橋健二は，おそらくそう思ったにちがいない。世の中の支配的に見えるものに対して批判的であろうとすること。ここに彼の強迫症の原因がある。彼にとって「文学」とは，あるいは「文学」への愛着とは「批判」や「抵抗」を表わすものであった。高橋健二の，ナチス時代以前の二冊の著書が「暴君にさからひて」戦った（と高橋健二が思っている）シラーとハイネを扱っているのは偶然ではないし，同じような理由と方向から戦後はヘッセ，ケストナー，グリム，ゲーテの伝記が書かれることになる。「批判」や「抵抗」をも体制の中に組み込んでしまう戦後という時代は，彼の強迫症の昂進には最適の土壌だった。

こうして「文化人」高橋健二は戦後の「大衆」にこそ受け入れられるのである。

4　批判精神という守護神

大正中期の旧制高等学校を襲ったもうひとつのものは，「教養」とは真っ向から対立するもの，あるいは「教養」やそれを成立させる社会構造を疑うもの，そしてもちろん実学が築く大日本帝国の繁栄を批判するもの，すなわちマルクス主義の嵐であった。ここでしばらく高橋健二の思い出話に耳を傾けてみよう。登場人物は，高橋と一高の寮で同室だった尾崎秀実である。

> またある時，何の話をしていたのかおぼえていないが，尾崎は「健ちゃん，出世するなんてばかなまねをよそうよ」と言った。それを私は強い感銘をもって受けとめた。自分が出世できる秀才でないからであったけれど，出世街道をわきめもふらず進もうとするエリートに対し一種の反感を抱いていた。それはわたしの場合は一種のひがみであったかもしれないが，まもなくすぐれた仲間が進んで受難の道を選んだのであるから，立身出世主義への批判は一高の中にもあったわけである。それを尾崎はずばりと言ったのである。彼の父が台湾の徳富蘇峰と呼ばれた新聞記者だったことを彼は誇りとしていたようで，役人として出世するより，父と同じ畑に進みたいとその時すでに考えていたのかもしれない。私も，父母の切なる願いにそむいて，法科でなく，文科に行くことをひそかに決意していたが，西田哲学一辺倒であったものの，哲学する頭がないので，悩んでいると，尾崎が「健ちゃん，独文やれよ」と言った。その一言が私の進路を決定したようである。私は彼の明敏さに敬服せずにはいられない。結局，彼はジャーナリストになり，私は外国文学者になった[27]。

別のところで，高橋は自分のことを「出世」派にも「左翼」派にも属さない「宙ぶらりんで中間派」[28]，「西田哲学や倉田百三の『出家とその弟子』に心ひかれる一群」[28]と呼んでいるが，これは典型的な「教養」派と言えるだろう。彼はこの生き方を生涯続けるために，福沢諭吉的な立身出世を第一の目標とする親世代の期待を裏切って，文学部独文科に進学する。しかしま

ず注目しておきたいのは，高橋健二が「左翼」側にすりよってみせるその不可解な身振りである。ただし，ここでの「左翼」とは何らかの理論でも実践でもなく，尾崎秀実のように「どんなにでも出世できる秀才だったのに」[29] その道を自ら進んで断つことであり，その根底には立身出世主義が支えた近代日本の発展への批判がある，というわけなのだ。だから，高橋健二もまた心情的には「左翼」であった。

私はずっと成蹊高校に勤めていた。毎年天長節には武蔵野から夜行軍で宮城に参拝に行くという学校であった。そして昭和十七年六月には，私は岸田国士の後を継いで大政翼賛会文化部長になったので，尾崎や松本（尾崎の裁判を支えた松本慎一・・・引用者）と別な方向を向いていた。松本が尾崎のために差入れする本などに協力するくらいのことしか，私にはできなかった。（中略）時代の激動によって後には離れてしまったけれど若いころ最も近しかった二人（尾崎と松本・・・引用者）を早く失ったことは，私の生来の孤独感を決定的に深めた[30]。

高橋健二のこの書き方によると，たまたま「別な方向を向く」ことになった原因は「時代の激動」や勤務先の事情など外部にあるものだったことになるが，これは必ずしも言い訳ではなかった。松本慎一が戦後，急死までの短期間ではあったが労働組合関係で活躍するようになったり，尾崎の獄中書簡集がベストセラーになったときには，高橋健二は反対に公職追放の憂き目にあうわけだが，その時，松本の活躍を頼もしく思い尾崎の名誉回復を心から喜ぶ元文化部長に，戦中の行為に対する反省，あるいはまったく逆に断固たる自信を求めるのは無理であろう。高橋健二の心の内なるもの，すなわち自分は体制に対して批判的である，少なくとも距離を置いているという自己理解は常に変わらないからである。「立身出世のコースをまっしぐらに進んだもの」[31] より，尾崎と松本のような「左傾して受難の道をたどったもの」[31] を「近しい」と感じ，ヘッセやケストナーのようなアウトサイダー的生き方

に共感を覚えたのは，こうした自己理解から出てきていた。われわれの目から眺めればただただ能天気にしか見えない高橋健二がしばしば口にする「生来の孤独感」やら「厭世」やらも，ここから発しているのかもしれない。この自己理解が「文学」の領域を越えて実際の行動面に移るとき，なぜ正反対の態度を導いてしまうのか。この問題は，ひとり高橋健二だけに関わっているわけではなかろう。

だが，それにしても当時「左翼」というものは，心優しき「教養」派を心情「左翼」へと暴力的に追い込んでいったようだ。やはり高橋健二と一高の寮で同室だった渡辺一夫について述べている部分を読むと，そう感じざるをえない。高橋は，自分と同じ外国文学者の道を進み，学究肌で誠実な（と高橋が思っている）渡辺一夫にやはり信頼を寄せていた。

> 仏文の秀才渡辺一夫は一高で同学年同室だった。彼は東京高校に勤めると共に，やがて東大の講師，教授となったから，よく研究室にも来ていた。へやはちがったが，時々会った。真砂町の彼の家に行って，フランス語とドイツ語の交換教授を幾回かやった。フランス叙情詩選を彼から教わった。その黄色い原書を私は今でも持っている。彼は豊かな家に住んでいて，蔵書もすでに豊富であった。フランスの原書を私に惜しげもなくくれた。それでいて彼は，「自分が左翼にならないのは，勇気がないからだ。勇気があれば左翼に走っている」とはっきり言った[32]。

高橋健二が東大の副手となり，渡辺一夫が東京高校に勤めながら東大に非常勤に来ていたのはちょうど昭和の改元期にあたり，その頃の大学内での左翼運動の隆盛は中野重治（高橋と同年の1902年生まれで当時独文科に在学中だった）の自伝的小説『むらぎも』にも描写されているところであるが，渡辺の発言からは，と言うより，渡辺の発言の引用のされ方からは（念のために言っておくが，高橋健二には渡辺一夫を滑稽化しようとする意図はいささかもない），大正的な「ヒューマニスト」であるらしい「文学青年」たちが

政治の季節の中で自分の「文学的」な在り様をどう自己規定してよいものか悩んでいる様子が窺える。近代日本の原理を拒否したつもりの二人の「文学青年」は，にもかかわらず，安定した制度の中にすっかり組み込まれていた。渡辺一夫も法科ではなく文科に進学するときに，高橋健二と同じように両親の期待を裏切るという一幕を演じたのだった。次に引用するのは渡辺一夫の回想である。

昔，大学の文科へ入りたくなった時，両親にその旨を申し出たら，非常に暗い顔をされた。そして形ばかりの親戚会議めいたものが開かれたらしいが，「好きなものなら・・・」という月並みな結論になり，「但し文士にならぬこと」という条件がつけられて文科行きは許された。僕は，文学少年ではあったが，勿論文士になる素質が自分にあるとは思っていなかったので，右のような条件は，少しも苦痛ではなかった。その当時の僕は，文科へ行くということを，次のような人間になる第一歩と考えていたようである。則ち，一生涯好きな本を ― 主として文芸書を ― 読みながら，静かに世の中片隅で暮す人間の第一歩というふうに。金持ちでもない家に生まれつつも，衣食には不自由せず，大学にまで通わせてもらえることになった僕が，将来，いかにして生活してゆくものかというようなことは少しも考えずに，贅沢きわまる夢を抱いていたことになる。滑稽・可憐であった[33]。（強調原文）

渡辺一夫が「好きな本を読みながら静かに世の中の片隅で暮す人間」になりえないのは経済的制約からでも，才能があるためにフランス文学研究界の重鎮になってしまったからでもない。自分をそのような人間と見做してしまうこと自体に潜む危険を，上で引用したような自分に対するフモールと皮肉をこめた文章を綴る渡辺はよく知っている。ここに，高橋健二との大きな差異があると言えよう。「文科行き」をまず「文士になる」ことと，すなわち社会から落ちこぼれた或いは自ら飛び出した危険で不幸なアウトサイダーに

なることと理解する親に対しても，滑稽・可憐に思い上がっていた自分自身にも，渡辺は寂しい微笑をおくる。当時の「秀才」にとって「文科行き」もたしかに一つの反抗ではあったろうが，だが自分でそう見做してしまう瞬間に最も危険な罠が口を開く。「文士」と「左翼」に無反省に近しいものを感じてしまう高橋健二にはこの罠が目に入らなかった。

高橋健二の学者生活は順調であったが，その上に胡坐をかくような気持ちは彼にはなかった。それはしかし，自分の制度的安定に対して居心地の悪さを感じることがなかったということを意味しているにすぎない。たとえば，留学中の高橋健二が1931年に初めてスイスにヘッセを訪ねたときの話を綴る文章に次のような一節がある。

> ここに旅立つ前筆者がハイデルベルク大学できいた講義の一つはヘッセの「ペーター・カーメンチント」で結ばれたのであった。その教授は国家から生活を保証されているであろうに，その講義を可能ならしめている当の作家ヘッセの生活は何人にも保証されていないのである。もちろん今の彼は最早生活に窮することはないであろう。しかし私は彼の歩んで来た道を振返り，多くの作家の運命を思い，その矛盾を強く感ぜずにはいられなかった[34]。(1931年11月)

高橋健二は常に恵まれない者の味方だった。彼らの立場から（つい）ものを見てしまった。第一次大戦時に非戦論を唱えたヘッセは当時ドイツからも故郷の町からも見離されていたのである。日本でも名の知れた有名なドイツ文学の教授たちには市民的な礼節さをもって接してもらっていながら「学問の後光を輝かしているかのようなその様子に，何か近より難いものを感じないわけには行かなかった」[35] 高橋健二はヘッセの「質素」な暮らしぶりや「人間的」な気さくさに触れ，例によって例のごとく感激する。高橋健二の十八番としてその後も何度も繰りかえし書かれるヘッセ訪問記（とりわけ1931年の最初の訪問）の中で，上の引用部分は二度と登場することがないと

ころを見ると，彼は，自分がヘッセより教授のほうに近いことにすぐに気づいたのかもしれない。にもかかわらず，彼は恵まれない芸術家の（つまり「本物の」芸術家の）位置に立つことを止めなかった。「恵まれない」と言うより，恵まれることを自ら求めたりしないと言ったほうがよいかもしれない。彼が、今まで恵まれなかったナチス文学を評価した理由もそこにあったし，田舎で淡々と暮らし続けるヘッセをナチス時代にも変わらず愛しつづけたのも，ナチス時代に「自画自賛も割り込み運動もしないのに，急に光を発し始めた」[36] カロッサに称賛の声をおくったのも，反対に戦後はカロッサの心の中のレジスタンスを強調したのもすべて，謙虚を愛する心から発している。逆に，たとえばレマルクの『西部戦線異常なし』については，ナチスの言説をそのまま受け入れて，ジャーナリズムに媚びた単にセンセーショナルだけの作品と断罪した。「ルマルク（ママ）は巨万の富を抱くと共に早くスイスに移り住んで，財産の安定をはかった。作品に性格を欠くものは，生活態度に於いても打算的な機会主義者であることが分かる」[37]（1933年９月）。

高橋健二が文学部教授に対して反感を持ったように，じじつ，ドイツではドイツ帝国成立以後，もちろん幾つかの例外はあるにしても，何らかな形で体制には批判的である有力作家たちの在り様と，ドイツ文学研究すなわち「国学」の教授たちの保守性・権威主義との間には埋められない溝ができていた[38]。これは，作家と教授のどちらが正しいかなどという問題ではなく，ドイツ文学研究の成立と存続が国家と分かちがたく結びついていたことを意味している。しかし，日本のドイツ文学者たる高橋健二は自由な道化のようにこの溝を，時にはこちら側へ時にはあちら側へと軽やかに飛びまわることができたのである。高橋健二の批判精神を支えたのは，この気楽さにほかならない。

注

1）高橋健二『文学と文化』，1942，鮎書房，２頁。なお引用中の旧漢字と旧かなづかいは改めた。

2）高橋，「知識人を文化戦へ」（『読売新聞』1942年７月３日）同書所収，301頁。

3）高橋「文化の反省」，『東京新聞』所収，1945年８月26日。

4）高橋『人間の生き方』，1990，郁文堂，６頁。

5）三木清『読書遍歴』，『三木清全集』第一巻所収，1966，岩波書店，387頁。ところで，高橋健二と高校時代に同級であった尾崎秀実の「第一回上申書」によると，この文化主義的傾向は彼らの高校時代にも続いていたことがよくわかる。「・・・わたしの級友たるドイツ語の組は社会問題の関心が薄く，最も優秀な人たちはこぞってこれも当時学界一部を風靡していたドイツ西南学派の哲学を研究しておりました。私本来の傾向からいえば，必ずしもぴたりとはしないのでありましたが，やはりこの傾向に支配せられて，ヴィンデルバントや，リッケルトの本をのぞいて見，左右田喜一郎氏の著書を読んだりしておりました。」　尾崎秀樹『ゾルゲ事件』，1983，中公文庫，28頁。

6）高橋「現代ドイツ文学とその水準について」（『新潮』1940年６月号），『現代ドイツ文学と背景』所収，1940，河出書房，82頁。

7）高橋『作家の生き方』，1972，読売新聞社，91頁。

8）ドイツ教養市民層とナチスとの関係については，野田宣雄『教養市民層からナチズムへ』（1988，名古屋大学出版会）とフリッツ・リンガー（西村稔訳）『読書人の没落』（1991，名古屋大学出版会）を参照されたい。

9）神田孝夫「帝国大学の思想」（『西洋の衝撃と日本』所収，1973，東大出版会，111頁から144頁）を参照されたい。

10）山下肇「カロッサと日本人」，『詩人の運命』所収，1957，書肆パトリア，96頁。

11）山下肇「ゲーテ，トーマス・マンと日本近代文学」，『日本近代文学と外国文学』所収，1969，読売新聞社，72頁。

12）高橋『万華鏡』，1978，主婦の友社，90頁。

13）高橋「シラーと第三国家の理念について」（『独逸文学』1938年10月），『ドイツ文学と背景』所収，121頁。

14）同書，130頁。

15）高橋『美しい日本への道』，1945，大日本飛行協会，６頁。

16）高橋「ヘルマン・ヘッセ」（『時事新報』1931年11月），『ドイツ作家論』所収，

1941，筑摩書房，288頁参照。

17）高橋「女性の教養と自覚」（『新女苑』1942年6月），『文学と文化』所収，173頁。「従ってユダヤ人的な考え方から，つまり個人主義的機会主義から出発している考えほど我々にとって危険なものはないと言わなければなりません。今まで文化とか，教養とか言われたものには，その要素の含まれていた場合が少なくありません。アメリカ的文化や教養はその代表的なものと言えます。」

18）高橋「人生論について」（『日本』1942年4月），『文学と文化』所収，285頁。

19）高橋『美しい日本への道』，9頁。

20）高橋「第三国家の文化政策」（『読売新聞』1937年4月），『現代ドイツ文学と背景』所収，177頁。

21）高橋『万華鏡』，49頁。「そのころ厭世的で，ひとりでひがんでいたので，教授たちに対しても，自分はまま子だというような気持ちで，親しまなかった。私の不心得であった。それだけ，学外で山本有三に私淑した。そして大学ではむしろ仏文に親しみを感じた。」

22）高橋「知識人を文化戦へ」，『文学と文化』所収，301頁。

23）高橋『作家の生き方』，120頁。

24）同書，157頁。

25）高橋訳『ドイツ戦没学生の手紙』，「訳者序」，1938（1982復刻），岩波書店，2頁。

26）高橋訳『ドイツ戦没学生の手紙』，「訳者のまえがき」，1953，新潮社，6頁。

27）高橋『さまざまの出会い・続』，1983，木耳社，97頁

28）高橋『人間の生き方』，273頁。

29）高橋『万華鏡』，19頁。

30）同書，25頁。

31）同書，24頁。

32）同書，50頁。

33）渡辺一夫「老耄回顧」（1972），『白日夢』所収，1990，講談社，74頁。

34）高橋「ヘルマン・ヘッセ」，『ドイツ作家論』所収，282頁。

35）同書，279頁。

36）高橋「医者として詩人としてのカロッサ」（『新潮』1935年8月）『ドイツ文学と背景』所収，223頁。

37）高橋「所謂『アスファルト文学』について」（『読売新聞』1937年6月），『ドイツ文学と背景』所収，53頁。

38）このことについては，ライナー・ローゼンベルク（林睦実訳）『ドイツ文学研究史』，1991，大月書店，22頁～30頁（「ゲルマン学者と作家。文芸学と同時代の文学との関係」）を参照されたい。

Kenji Takahashi oder der Untergang der deutschen Bildung in Japan

Rieko TAKADA

Resümee

Man kritisiert oft den Opportunismus von Kenji Takahashi(1902～), der während der Kriegszeit Übersetzer und Kommentator der Blut-und-Boden-Literatur war und sich dann plötzlich in einen energischen Hesse- und Kästner- Forscher verwandelt hat. Aber Takahashis Identifikation mit dem Pazifisten Hesse oder dem Widerstandskämpfer Kästner ist unreflektiert.

In der vorliegenden Arbeit gilt meine Analyse indessen nicht seiner unverschämten ›Verwandlung‹, sondern seiner inneren Kontinuität : Takahashi war seit seiner Gymnasiastenzeit ein Anhänger der deutschen Kultur und Bildung. Dabei ist bemerkenswert, daß er sich als Germanist immer darum bemüht hat, die deutsche ›hohe‹ Literatur in Japan zu popularisieren, was eigentlich dem elitären Wesen der deutschen Bildung widerspricht. Takahashi versuchte durch seine öffentlichkeitswirksame Tätigkeit, ob als Nazi-Sympathisant oder als Hesse-Übersetzer, die gesellschaftliche Funktion der japanischen Germanistik zu legitimieren, die sich in der 20er Jahren als rein universitäre Disziplin etabliert und dabei allmähnlich Außenkontankte zur japanischen kulturellen Öffentlichkeit verloren hatte. Im "Fall Kenji Takahashi" verkörpert sich der Gegensatz zwischen Popularisierung und Akademisierung der deutschen Literatur in Japan,

der heute noch zu beobachten ist.

Takahashi versteht sich (komischerweise!) als kritischer Intellektueller. Seinen Memoiren zufolge stellte er sich als Elite-Gymnasiast gegen die Erwartungen seines Vaters: statt als Jurist eine gute Karriere ins Auge zu fassen, studierte er Germanistik. Dieser gegen das Prinzip des modernen Japan revoltierende Antikarrierismus bedeutete für ihn eine kritische Einstellung zum Establishment, das die Literatur einfach für etwas Nutzloses hält. Takahashi hat die deutsche Kultur und Bildung als Gegenmittel gegen die unmenschliche Zivilisation sowie die moderne kapitalistische Gesellschaft hochgeschätzt. Seine falsche Selbstverständnis verführte ihn zur unkritischen Bewunderung der deutschen Kultur.

Gerade Takahashis (subjektiv) ehrlicher Wille hat ihn opportunistisch gemacht. In diesem Sinne repräsentiert seine Komödie zugleich die Tragödie des modernen Japan.